

来る年へ

宮坂静生

現代俳句協会七十周年記念祝賀会

来る年へ鏡開きの槌揃ふ
釣針の鉤の宿世や松の内
白鯨空に放てる冬日かな
梢揃ひたる里山や冬日向
冬の日の切れの勁さよ火食鳥
山磨き立てゝ鵝色冬至の日



天狼も昴も知らず地を這へる
着ぶくれて獣名残の尾骶骨
信濃柚大葉川芎実をいそぐ
干柿になりたくなしと柿が言ひ
干柿のどすんと黝し生きるばい
真澄とも掛魚祭で出会ひたし
八ヶ岳根腰ぐるりと廻り春を待つ

大淀川のほとり

宮坂 静生

旧臘の初め、宮崎にいた。宿舎の眼下に日向灘の河口近い大淀川が見渡せる。川がゆったりと大きな翼を休めた感じから、ゆくりなくこの一年の大方を顧みる気分になっていた。多分わが半生でいちばん忙しかった年であっただろうか。

十一月の勤労感謝の日に帝国ホテルで行われた現代俳句協会創立七十周年記念大会には午後の俳句大会、講演会、シンポジウムに七百余名、夕刻からの式典、祝賀会には来賓をお招きして六百名近く、充実し、愉しい懇親会が実現した。戦後七十年を回顧した俳句界の催しではもとより初めてのものではあった。私は主催者の一員として、俳句界の祭事を文化として捉えたい願いがあった。俳人だけのお祭ではない。俳句の存在が鋭敏で思慮深い日本人の感受性の結晶であり、核である。それは日本文化そのものではないか、こんな問いに共感してくださる方々と一夕を過ごしたい。そんな思いが達成できたことがうれしかった。

大会のこと以外でも十月から十一月は多忙な中で身に沁みる不思議な体験をした。実はそのことを書き遺して置きたい。

十月二十五日に私は積年の書『季語体系の背景 地貌季語探訪』(岩波書店)を上梓した。本書は私が俳句を意識し出してからの六十年近い思索の書であった。端的には言い得ないのがあるが、あえていえば、俳句の核に存在する季語(季題)に関して世上に流布する大方の考え方に対する根源的な懷疑である。「これは歳時記編纂史に金字塔を立てた山本健吉の『季題・季語ピラミッド説』に対する異議申し立てとい

える」(地貌からの「日本文化」照射)齋藤慎司・産経二〇一七・一二・一〇書評)と書いてくださったが、まさにその通りである。

私の見方では、その点をいちばん意識していたのが江戸時代の芭蕉であった。芭蕉が五十年の生涯を賭けて体験を思索化した『おくのほそ道』は五個の景物と称する「雪月花」ととぎす紅葉」を「ピラミッド」の頂点とする季語体系への強力なアンチテーゼ(反論)である。そこでは実感を重視した地貌の発見に力を注いでいる。その点については、先掲書に収録する予定すでに総合誌「俳句」(角川文化振興財団)に連載した稿があるが、収録分量が多すぎて今回の書物からは省いている。その後、さらに芭蕉のほそ道に拘り続けている中で、私はほそ道の頂点にあたる荒海の一句に、その執着の極まった思いを抱いたのであった。

荒海や佐渡によこたふ天^{あまの}河

その思いはほそ道全体への読み方の問題へと広がった。飛躍したまとめ方になるが、私の「おくのほそ道」への疑義を簡条書きにすると、二点になる。

一つは、「おくのほそ道」が書かれた時期と芭蕉の生活状態との関連が重視されていないのではないか。その点が作品にどう反映されているかを考える必要があるのではないか。

みちのくを中心とした旅は元禄二年三月二十七日(陽暦五月十六日)江戸出立から、九月六日(陽暦十月十八日)大垣を後に伊勢への出立で終わるのであるが、実際に作品が書か

れたのはそれから四年後、逝去する一年前の元禄六年四月以降である。芭蕉の実生活では、甥桃因の死に関わる係累寿貞家族との泥沼の暮らしの最中に執筆されたと思定される。その芭蕉の心理状態が当然作品にも反映されているのではないか。

二つには、同時代の文学との関わり、私はとりわけ芭蕉の意識に同時代の井原西鶴への対抗意識を感じ取りたいのである。「人情をいふとても、今日のさかしきまぐままで探り求め、西鶴が浅ましく下れる姿あり。わが徒の文章は、慥に作意を立て、文字はたとひ漢意を借るとも、なだらかにいひつづけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐かしくいひとるべし、となり」(『去来抄』故実)との評は周知であるが、かえってこれは西鶴を熟知した上での評価といえないだろうか。

以上の点について、ここでは詳述は避けたい。異説が出されることを承知で、結論だけを述べる。

「おくのほそ道」は「実感を重視した地貌発見の書」だと先述した。

白河の関を越えた須賀川で「田植うた」に新たなみちのくの「風流」を感じた芭蕉が、「夏草」に高館の地貌を見直し、今回の旅の一つの到達地尾花沢で鄙ことば「ねまる」(楽に寛ぐ)を堪能する。若き俳士左吉の出羽三山案内に感激し不易流行の俳論を説き、日本海に臨む象潟を俳諧のメッカに仕立て、酒田での「温海山」歌仙に愛情表現の実感を吐露する。

錦木を作りて古き恋を見ん 翁

ことなる色をこのむ宮達 良

恋しい女にひたすら通うみちのくの純情な男を至純とみる芭蕉、つぎつぎ色を好む業平風の色恋に恋の醍醐味を想定す

る曾良。おくのほそ道のクライマックスは越後路「荒海」の句に極まる。「暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず」と書かれた荒海の句の前文の「病」とはなんであるうか。

名所旧跡が乏しい越後路の紀行文を簡略にはぶく口実(蓑笠庵梨一『奥細道菅菰抄』)だと見る愚説から諸説紛々。

私は「荒海」の句を着想し表現するまでの苦しみこそ「病」と表現したものを読みみたい。佐渡島を枕に「よこたふ」(他動詞)「天河」は至純の愛を貫いた男女の心中の姿をそれとなく暗示しているのではないか。

芭蕉は西鶴の「好色五人女」(貞享三年刊一六八六)のお夏清十郎、八百屋お七など著名な巷説からの五人の恋愛、姦通事件を身につまされる思いで読み、上述の「西鶴が浅ましく下れる姿」と評しても、今日の人情を否定しているのではない。わが方は「なだらかに」「懐かしく」表現すると対抗意識を見せているのではないか。

芭蕉の身辺に拭い難い桃因・寿貞の愛憎がらみの痛恨事が存在している。「閉関の説」で芭蕉が記したのも人間の愛慾は避け難いものとの述懐であった。その投影がほそ道の総括に相当する「荒海」の一句に結晶したものと私は読みたい。

私がこの点に思いが至ったのが昨年十月十一日、伊賀に呼ばれ、料理人芭蕉が立てた月見の献立を食する会に臨席した夜である。膳に田螺が出た。夜は一睡もできないで、芭蕉の霊に憑かれたものか、翌日はやっと大会を務め、ふらふらと伊賀を後にした。「病おこりて」とは、ほそ道執筆時の芭蕉自身の精神の困憊した実感が「荒海」の句を介して紀行文中に滲み出たものであったと考える。